



# おさかな瓦版

No.15  
2007.2



シリーズ：東シナ海のさかなたち

## 第1回 [ キダイ ]

～昔も今も以西の主役～

いかつり漁業で新しい集魚方法の  
開発に取り組んでいます

「まぐろ研究所」を設立！！



あんじいの  
「おさかなクイズ」



# シリーズ第1回：東シナ海のさかなたち 「キダイ」～昔も今も以西の主演～



以西底びき網の漁獲物  
大きな魚がマダイ。他はキダイ。



延縄の漁獲物  
キダイ、アカアマダイ、マサバ、イズカサゴ



延縄によるキダイの漁獲



以西底びき網によるキダイの箱詰め

東シナ海は日本列島の西側にある日本、中国、韓国等に囲まれた海です。

これから代表的な魚をいくつか紹介していきますが、まず、本号ではキダイというタイ科の魚を紹介します。マダイに似ていますが、吻(眼から口の部分)が黄色味を帯び、背中にも3個の黄色の斑紋があるためキダイと呼ばれています。マダイよりも鮮やかな色合いをしており、顔も愛嬌があります。また、マダイなど他の赤色系のタイ類

とは異なり、稀ながら性転換をするという特徴もあります。太平洋側では千葉県、日本海側では青森県以南の各地から台湾や南シナ海にまで分布しますが、主要な分布域は、東シナ海から日本海西部です。群れをなす習性があり、延縄漁業の操業の際に連なって漁獲されることから、別名れんこだい(連子鯛)とも呼ばれています。

東シナ海を代表する漁業の一つである以西底びき網漁業(操業許可海域が東経128度30分以西であることからこのように呼ばれます)は、当初キダイなどのタイ類を狙って操業を行い、その後、漁場を中国や韓国に近い海域に変えながら漁獲物も替えていった歴史を持っています。そのため同漁業の最盛期にはキダイは脇役となっていました。近年、関係国との漁場の競合などにより以西底びき網漁業の漁場が、再び日本に近い海域に戻ってきたため、主演の座に返り咲いています。

水産総合研究センターが行っている資源評価では、資源は中位水準で増加傾向にあると診断しており、資源状態

も悪くありません。東シナ海を代表する底魚(主に海底近くに分布する魚：そこうお)として今後も大事に利用していくことが期待されています。

マダイより小型で、沖合で漁獲されるために、塩焼き等にされることが多いですが、淡泊で美味しい魚です。福井県では新鮮なものが小鯛の笹漬として名物になっています。ただ、長崎では伝統的に正月や結婚式などの祝い事に欠かせない魚であったのですが、近年その習慣が薄れてきています。また、マダイの養殖等により、タイ類全体の価格が下がっていることなどのため、キダイの価格が上がらないのが、関係者の悩みの種です。資源を大事に管理するとともに、美しく美味しいキダイを、どのようにして食卓の主演の座に返り咲かせるかが思案のしどころです。

(時村宗春：西海区水産研究所)



野菜あんかけ

吸い物

南蛮漬け

料理写真提供：脇山順子(長崎の味研究グループリーダー)

## おさかなクイズ?

答えは裏表紙にあるよ!



ヤマメと同じ魚は?

- A: サケ
- B: ニジマス
- C: サクラマス

# いかつり漁業で新しい集魚方法の開発に取り組んでいます



アカイカ



昼間のいかつり風景（自動いかつり機でアカイカを獲ってます）

皆さん、「いかつり漁業」と聞いて何を思い浮かべるでしょうか。ほとんどの人が、夜中に集魚灯（白熱灯）を船上から海中に向けて照らして、その光に集まってくるイカを釣り上げている姿を思い浮かべると思えます。

今回は、私たちが今取り組んでいる北太平洋に分布するアカイカを釣り上げるための集魚方法の開発の仕事についてお話しします。

アカイカは、アジやイワシのような密度の濃い群れをつくらず、まばらに分布しており、餌の行動にあわせて昼間は水深300メートル付近の深

い海へ潜り、夜は表層へ浮かんできます。この分布生態を利用して漁師さんたちは、かつては、夜間に全長30キロメートルにも及ぶ大規模な流し網でアカイカを漁獲していました。しかし、平成4年の国連決議で海洋の生態系を保全するという理由で、公海での大規模流し網漁業が禁止されました。アカイカを獲る漁業はそれ以降、釣りにより行われています。

まばらに分布しているアカイカを効率よく漁獲するために、夜は船上から集魚灯で海を照らし、表層にいるアカイカが集まってくるところを釣り上げます。昼間は深い海へ潜って

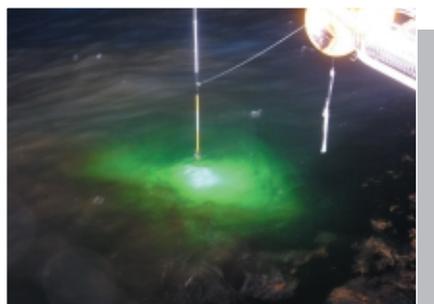
いるアカイカを集めるため、メタルハライド水中灯という道具で深い海の中で光を照らす方法が開発され、現在のいかつり漁船では一般的に使われています。

開発調査センターでは、平成18年度より従来のメタルハライド水中灯に代えて、消費電力が少なく、寿命も長く、簡単に色が変わえられ、かつ、点滅・点灯が可能など多くの機能を持つLED（発光ダイオード）を導入し、この光源のアカイカを集める効果を確認するための試験を開始しました。具体的には調査に使用する色を青・青緑・緑・白の4色とし、点滅・点灯効果も含めアカイカを集める効果について確認していくこととしています。

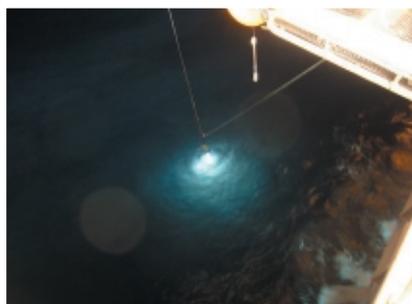
LEDは我々の生活においても新たな光源として期待が高まっていますが、いかつり漁業においても夜間操業への応用や省エネの一助になることを期待しつつ、調査を展開していくこととしております。

今後の調査結果にご期待ください！

（山下秀幸：開発調査センター）



緑色のLED水中灯



白色のLED水中灯



北太平洋のアカイカって大きいんです！

# 「まぐろ研究所」を設立！！

まぐろ類は日本人に最も好まれる魚のひとつですが、近年、世界的な健康志向の高まりによる魚食ブームを背景に需要が急増してきています。このため漁獲量が増加し、クロマグロ、ミナミマグロを筆頭に、世界中のまぐろの資源量が減少していると指摘されています。さらに、小型のまぐろを養殖用として利用するため大量に漁獲するようになり、資源への影響が危惧されています。

このような状況の下、消費者に安全・安心なまぐろを安定的に供給するには、

まぐろ資源の適切な管理、卵から育てた稚魚(人工種苗)による養殖や放流、漁業の効率化や流通の改善等を総合的かつ緊急に進める必要があります。

そこで当センターと水産庁は、効率的にまぐろの研究を進め、まぐろ資源を将来にわたって永く利用するため、平成19年2月1日付けで仮想的(バーチャル)な研究組織として「まぐろ研究所」を設立しました。

この研究所は、当センターの既存の研究所、栽培漁業センター及び開発調査センターの、まぐろの研究開発に関

連した部門で構成したプロジェクトチームです。水産庁もこの研究所に参画し、研究成果を施策に反映させる予定です。

なお、これから具体的な研究開発計画を作成し、4月から本格的な活動を開始する予定です。さらに、大学や民間企業等との連携を強化し、迅速な問題解決に繋げるために「まぐろ研究連絡協議会」を設置することにしています。



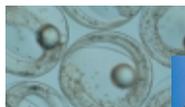
積極的な増養殖の推進  
安定して生産する養殖技術の開発など

持続的利用のための  
資源管理の推進  
まぐろ資源の変動要因の解明など

**まぐろ研究所**  
既存の人材・施設を利用



経営の安定化及び流通の改善  
漁獲物の価値を高める漁法・  
処理法の開発など



まぐろ研究連絡協議会  
外部機関との連携



## おさかなクイズ 答え



ヤマメと同じ魚は？

答え C：サクラマス

溪流の女王と呼ばれる可憐なヤマメと、海で生活し、70cm、8kgもの大きさになるサクラマスが同じ種類とはとても思えないかも知れません。しかし、ヤマメとサクラマスは同じ種類で、育つ場所によって大きさや色の違いが起こります。ヤマメもサクラマスも、生まれる時は全く同じ魚で区別が付きません。溪流で育つうちに、エサや環境の違いで成長に差が出てきます。ところが、成長が良

い、大きいヤマメがサクラマスになるかというそうではなく、成長が悪く小さいヤマメが、新天地を求めて海へ旅立っていくのです。海に降りたサクラマスは豊富な餌を食べ、1年後には川に残ったヤマメよりも遙かに大きくなって、また産卵のため川に戻ってきます。



標準的な大きさのヤマメ(下)とサクラマス

## お詫びと訂正

本誌第13号に掲載した「書籍で見る日本の水産 - 明治時代の水産教育 -」の中に、誤り等があると読者の方からご指摘があり、改めて調査したところ、下記のとおり誤り・不適切な表現がありましたので訂正いたします。

- 1段目7行目 農商務省と協議し 農商務省に建議し
- 2段目10行目 先生の参考書 いわば現在の「学習指導要領」

入学時と卒業時の生徒数をもって進級できなかった学生が多かったかもしれない旨の記述については、対比する年度が適切ではなく、また他に根拠はなく、不適切な表現でした。関係者の方々に詫言申し上げます。

なお、水産伝習所の創立年については、ご指摘の通り明治22年と記されている資料(大日本水産会伝習所紀要等)の存在は承知しておりましたが、本稿では東京海洋大学のホームページ等の資料に記載されている明治21年を採用しました。

これらの不正確・不適切な記述により読者の皆様にご迷惑を与えたことに対し、改めてお詫言するとともに、さらなる正確・適切な記述に努める所存ですので、今後ともご支援・ご鞭撻の程、よろしくお願い申し上げます。

表紙：キダイ(写真提供 山脇順子：長崎の味研究グループリーダー)

